



世界文学全集 25

トルストイ
アンナ・カレーニナ

Ⅱ

中村白葉 訳

河 出 書 房

世界文学全集 25 トルストイ II



© 1967

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和34年12月24日 初版発行

昭和42年10月30日 32版発行

定価 390 円

訳 者 中 村 白 葉
発 行 者 河 出 朋 久
印 刷 者 河 出 朋 久
装 幀 原 弘

印 刷・関東印刷有限公司
製 本・株式会社若林製本工場
本文用紙・国策パルプ工業株式会社
同 納 入・東邦紙業株式会社
ク ロ ー ス・東洋クロース株式会社
同 納 入・株式会社柏原洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房
神田小川町三の六 会社

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

アンナ・カレーニナ Ⅱ

第五編	三
第六編	一五一
第七編	三二〇
第八編	四四二
年 譜	五〇五
解 説	（桑原武夫） 五一五

アンナ・カレーニナ

Ⅱ

——復讐は我にあり、我これを酬いん——

主要人物

アンナ（アルカジエヴァ・カレーニナ） この小説の女主人公。カレーニンの若い美貌の妻、ウロンスキとの運命的な恋に身をほろぼす。

カレーニン（アレクセイ・アレクサンドロヴィッチ）
ペテルブルグの有名な官僚政治家。形式的な精神主義者で、冷たい皮肉な男。

セリョージャ カレーニン夫妻の一人むすこ。

ウロンスキ（アレクセイ・キリーロヴィッチ） 金持で美男の貴族青年将校。社交界と連隊の寵児。アンナの情人。

オブロンスキ（ステパン・アルカジエヴィッチ）

アンナの兄。社交界の通称ステイーワ。享楽的性格だが、根は善良な、人づきあいのよい自由主義的な貴族。

ドリー（ダリーヤ・アレクサンドロヴナ） オブロンスキの妻。ステエルバーツキ公爵の長女。六人の子供をかかえて、夫の放蕩に苦しむ。

レーヴィン（コンスタンチン・ドミートリエヴィッチ）
富裕な貴族地主。百姓とともに労働を楽しむ、誠実で、純情な人。キティを恋し、ついに妻とする。

キティ（エカテリーナ・アレクサンドロヴナ） ス

チエルバーツキ公爵の末娘。かれんな美少女。ウロンスキへの恋に傷つくが、レーヴィンの愛に甦える。

ステエルバーツキ老公爵夫妻 モスクワの貴族。

セルゲイ・イワノヴィッチ・コズヌイシエフ レーヴィンの異父兄。有名な著述家。

ニコライ・レーヴィン コンスタンチン・レーヴィンの

肉親の兄。巨額な遺産の分けまえをつかいはたし、いまは窮迫と病苦にあえぐ敗残者。

マリヤ・ニコライエヴナ ニコライ・レーヴィンの情婦。

ベーツ・トウヴェルスカーヤ公爵夫人 ウロンスキ

のいとこ。ペテルブルグ社交界の一中心人物。

リディヤ・イワノヴナ 偽善的な社交界の婦人。カレーニンの精神的な女友だち。

ワルワラ アンナの叔母。オールド・ミス。

ワレニカ シターリ夫人の養い子。キティの親友。

アガフイヤ・ミハイロヴナ レーヴィンの家政婦。

ヤーシエヴィン ウロンスキの友人の将校。

スヴィヤーズスキ 地方の貴族。レーヴィンの友人。

第五編

一

スチエルバーツキイ公爵夫人は、あと五週間しかない齋戒節^{さいかいせつ}までに婚禮をあげることは、とてもできない相談だと考えた。というのは、花嫁の婚禮持参品がそれまでには、半分もとのうまいと思われたからであつたが、それかといつて、齋戒節後ではあまり遅くなりすぎるといふレーヴィンの意見にも、同意しないわけにはいかなかった。スチエルバーツキイ公爵の年老いた肉親の伯母^{ばう}が重態で、いまにも死にそうになつていたので、そうすれば、その喪がいっそう婚禮を延ばすことになるからであつた。そこで公爵夫人は、持参品を大小ふたつに分けることにきめて、とにかく婚禮は齋戒節までにあげることに同意した。彼女は、小口の持参品のほうは今すぐに全部を用意し、大口のほうはあとから送ることにきめた。そして、レーヴィンがそれについて承知したともしないとも、どうしてもまじめに返事をする事ができない

でいると、彼女は彼にたいしてひどく腹をたてた。というのも、つまりは、若いふたりは婚禮がすむとすぐ、大口のほうの持参品の必要でない田舎^{いんか}へ帰つてしまうことになつていたので、この思いつきがいつそう好つごうだつたからである。

レーヴィンは、ひきつづきずっと、同じ無我夢中の状態にあつたので、彼には、自分と自分の幸福とが、世のなかのあらゆるものにとつて最も大切な、唯一の目的を構成しているように思われて、何事にしろ、いまの自分には、考えたり気をくぼたりする必要はなく、何事も他人がやってくれるような気がしていた。彼は将来の生活のためのプランや目的さえも、少しも持つていなかった。彼はすべてがうまくいくものと信じて、その決定を他人まかせにしていた。兄のセルゲイ・イワーノヴィッチと、ステパン・アルカジエヴィッチと、公爵夫人とが彼に、彼のなすべきことをさしずしてくれた。彼はただ、自分にいわれることにはなんでも、そのとおりに同意するだけであつた。兄は彼のために金を調達してくれたし、公爵夫人は式がすんだらモスクワを立つことをすすめた。ステパン・アルカジエヴィッチは外国へ行くことをすすめた。彼はそのすべてに同意した。(それがあなたに愉快でしたら、お好きなようになすつてくだ

さい。ぼくは幸福です。そしてぼくの幸福は、あなたが何をなさろうと、ふえもしなければ減りもするものではないのですから。」こう彼は考えた。彼は、外国へ行けというステパン・アルカジエヴィッチのすすめをキティに伝えたときに、彼女がそれには賛成しないで、ふたりの未来の生活について彼女自身のあるはつきりした要求をもっていたのに、少なからず驚かされた。彼女は、レーヴィンには田舎に仕事があり、彼がそれを愛していることを知っていた。彼女は、彼の見るところでは、ただその仕事を理解していなかったばかりでなく、理解しようとも思っていないようであった。しかし、このことは、彼女がその仕事を大切なものだと考えることをさまたげなかった。それに彼女は、自分たちの住居が田舎になることを知っていたので、自分の住むべきところでもない外国へよりは、自分たちの家になるところへ行きたいと思ったのである。このはつきりと言ひあらわされた意向は、レーヴィンを驚かした。しかし彼は、自分にはどちらでもよかったので、さっそくステパン・アルカジエヴィッチに向かって、まるでそれが彼の義務でもあるように、田舎へ出むいて、そこで、彼の豊富な趣味によって、彼の知っていることを万事うまく整えてきてくれるようにと頼んだ。

「そこでだ、ね、きみ」とステパン・アルカジエヴィッチは、新夫婦帰住のために必要ないっさいの準備を整えにいつてきた田舎から帰ってから、あるときレーヴィンにこういった。「きみは懺悔をすましたという証書をもつてるだらうね？」

「いや。どうして？」

「それがなくちゃ、式があげられないよ」

「おやおやおや！」とレーヴィンは叫んだ。「ぼくはもう九年ばかり精進をしながら思っているよ。ぼくはそんなことは考えてもいなかった」

「あきれたもんだね」と、笑いながらステパン・アルカジエヴィッチはいった。「ぼくのことをニヒリストだなんていつてくるくせに！　だが、とにかくそれじゃいけないよ。きみはどうでも精進をしなくっちゃ」

「じゃあいつ？　あと四日しかないんだからね」

ステパン・アルカジエヴィッチは、このほうもうまくやってくれた。そこでレーヴィンは、精進をはじめた。レーヴィンには、自分は信仰をもたないけれども他人の信仰は尊敬している人のつねとして、教会のすべての儀式に参列したり、たずさわったりするのが、非常に苦しいことであった。今のうちに、気分をやわらいだ、何事にも感じやすくなっている場合には、この自分をいつわら

ねばならぬということは、ただ苦痛だったばかりでなく、まったく不可能なことのようになと思われた。いまや彼は、その光榮と盛運のときにあたって、うそをつくか、神聖冒瀆（ばいとう）をあえてするかしなければならぬ場合にたちいたったのである。彼は、自分にはとても、そのどちらもできそうにない気がした。そこで彼は、精進をしないで証書をもろうことはできないかと、幾度となくステパン・アルカジエヴィッチにきいてみたが、ステパン・アルカジエヴィッチは、それはできないと言明した。

「何を、きみはそんなにごたいそうに考えてるんだ——たった二日のことじゃないか？ それに相手は、とても人の好い、如才（じざい）ないじいさんだよ。あのひとなら、きみがちっとも気がつかないでいるうちに、その菌をうまく抜いてくれるよ」

最初の祈禱式に立ったとき、レーヴィンは十六、七のころに経験した、あの強い宗教的感情の若々しい思い出を、心のなかで新たにしようとしてみた。が、すぐに、それがぜんぜん不可能であることを確信させられた。彼はそれらのすべてを、人を訪問する習慣のような、なんの意味もない、空虚な習慣としてみようとしてみた。

が、それすら彼には、どうしてもできないような気がした。レーヴィンは、対宗教の關係では、同時代の大多数

の人々と同様に、きわめてあいまいな境地にあるのであった。彼は信ずることができなかったが、同時にまた、それらのことがすべてまちがいであると確信しているわけでもなかった。で、彼は、自分のしていることの意味を信ずることもできなければ、またそれを空虚な形式として平気で見すごすこともできないので、この精進（しやうじん）のあいだじゅう、自分自身にもわけのわからない、そのために、彼の心内の声のささやくところにしたがうと、なにやら偽善的な、よくないことをしているような、妙にばつ（ばつ）のわるい、恥ずかしい感じを経験していた。

勤行（ごんぎやう）の行なわれているあいだ、彼は、あるいは、自分の見解にそむかないような意味を祈禱につけたそうとつとめながら、じつとそれに耳をかたむけたり、あるいは、自分にはとてもわからないから、非難するのが当然だと感じながら、つとめてそれを聞かないようにして、自分の思想や、觀察や、また教会の中でなんのなすこともなくぼんやり立っているこのときにあたって、なみなみならぬ生彩（せいさい）をもってその頭にうかび出てくる回想などに、没頭していた。

彼は屋の祈禱、夜の祈禱、夕べの戒律（かいりつ）とをすませ、そして翌日は、いつもより早く起きでて、お茶も飲まずに、朝の戒律をきいて懺悔をするために、八時に教会へ

出かけて行った。

教会には、ひとりのこじき兵士と、ふたりの老婆と、寺男たちのほか、だれもいなかった。

薄い法衣（ろうい）の下（した）の長い背中がはつきりとふたつにわかれて見える若い助祭（じょさい）が彼を迎えて、すぐに壁際の小さいテーブルのそばへ行き、戒律（かいりつ）を読みはじめた。彼が読みあげていくにつれて、とくに『バミールロス、バミールロス（許された、許された）』と聞こえる、「ゴースボジ、バミールイ（神よ、あわれみたまえ！）」という同じ言葉が、早口に幾度となくくりかえされるのを聞いていると、レーヴィンは、自分の思想は閉じこめられ、封印（ふういん）されていて、いまはそれに触れることも動かすことも許されず、うっかりすればめっちゃめっちゃになってしまうことを感じた。

で、彼は、助祭の後ろに立ちながら、それを聞きもせねば追求（しゅうす）もしないで、ただ自分だけのことを考えつづけた。（まったくあの女（おんな）の手には、非常に豊富な表情があるなあ）と彼は、昨日彼女とふたりで隅のテーブルのそばに掛けていたときのことを思いだして、考えた。そういう場合には、このごろはほとんどそうであるように、ふたりには何も話すことがなかった。で、彼女は、テーブルの上へ片手をのせ、それを開いたり閉じたりして、その運動に見いりながら、ひとりで笑いだした。彼は、その

手に接吻してやったことや、そのあとでばら色のてのひらの筋をみてやったことなどを思いうかべた。（おや、また許された、だな）と彼は、十字を切ったり、礼拝したり、同じく礼拝している助祭の背中（うで）のしなやかな動きを見たりしながら、考えた。（それからあの女は、おれの手をとって筋を見た、そして——まあやっぱりなお手ですこと——なんていったつけ）そこで彼は、自分の手と助祭の短い手とを見くらべた。（ああ、もうじき終わりだな）と、彼は思った。（いや、また初めからやるらしいぞ）と彼は、祈禱（きと）の声に聞きいりながら考えた。（いや、やっぱりおしまいだ。そら、あのとおりの地面につきそうなおじぎをしている。あれはいつもおしまいのときにやるやつだ）

毛長ビロードのそで（そで）のなかの片手で、そつと三ループリ紙幣を受け取ると、助祭は、書きとめておきまうと言（い）い、がらんとした教会の敷き石に、元氣よく、新しい長くつの音を立てながら、祭壇の中へはいっていった。一、二分すると、彼はそこから顔をのぞけて、レーヴィンを手まねきした。と、このときまで閉じこめられていた思想が、レーヴィンの頭のなかで動きはじめたが、彼は急いでそれをおいのけた。（まあどうにかなるだろう！）こう考えて説教台のほうへ歩きたした。階段に足

をかけて、右のほうをふりむくと、司祭の姿が見えた。

まばらなごま塩のあごひげと、疲れたような人のよさそうな目をもった老司祭は、聖書テーブルのかたわらに立って、聖礼記のページをめくっていた。彼は、かるくレーヴィンにえしゃくをして、すぐに、習慣になった声で祈禱文の朗読をはじめた。そしてそれがすむと、地面にとどくほど低く礼拝して、レーヴィンのほうへ顔をむけた。

「あなたの懺悔をきこしめしながら、キリストさまは人知れず、ここにお立ちになっておられます」と彼は、十字架上のイエスの像をさしながら、いった。「あなたは、聖使徒教会の教義をことごとく信じておいでになりますかな？」と司祭は、レーヴィンの顔から目をはなし、両手を肩帯の下で組みあわせながら、つぶけた。

「わたしはすべてのことを疑ってきました。今も疑っています」とレーヴィンは、われながら不愉快な声でいって、口をつぐんだ。

司祭は、彼がもっと何かいうかと思って、数秒間待っていてから、ふたたび目を閉じて、Oの音を早く発音するウラジミールふうの発音でいった――

「疑いは、人の弱点としてありますが、しかしわかれわれは、お慈悲ぶかい神さまがわれわれの心を堅

固にしてくださるように、お祈りをしなければなりません。あなたはとくにこれというような罪をおもちですか？」と彼は、つとめて時間を空費しまいとでもするよう、少しのまもおかずにつけくわえた。

「わたくしの一ばん大きな罪は疑いでありました。わたくしはすべてのことを疑っています。そして多くの場合、疑いのなかにおります」

「疑いは、人の弱点としてありますが、しかし司祭は同じ言葉くりかえした。「あなたはおもにどういうことを疑っておられますかな？」

「わたくしは、すべてのことを疑っております。ときには、神の存在をすら疑うことがあります」レーヴィンは思わず口をすべらして、自分の言葉のあまりの無作法さに、われながらぎょっとした。が、見たところ、司祭には、レーヴィンの言葉はなんの印象をもあたえなかったらしい。

「神の存在にどういふ疑いがありえますよう？」と、司祭はやつと見えるくらしい微笑をうかべて、急いでいった。

レーヴィンは黙っていた。

「あなたは、神の創造を見ていながら、その創造主にたいしてどんな疑いをもつことができますか？」と司祭

は、習慣になった早口の話しぶりでつづけた。「では、大空のドームをいろいろの発光体で飾られたのはどなたですか？　大地をこの美しさでおおわれたのはどなたですか？　どうして創造主がなくていられましょう？」と彼は、いぶかしげにレーヴィンを見ていった。

レーヴィンは、司祭を相手に哲學的議論をはじめのはよくないと思ったので、その問題に直接関係のあることだけを答えとして、いった。

「わたくしはぞんじません」と彼はいった。

「ぞんじない？　それならどうしてあなたは、神が万物をおつくりになったという事実をお疑いなさるのだな？」と司祭は、楽しげなげんな色をうかべていった。「わたくしには、なんにもわからないのです」とレーヴィンは顔をあからめて、自分の言葉のいかにもばかげていることを、こういう場合にはそうならざるをえないことを、感じながらいった。

「神にお祈りなさい、神におすがりなさい。聖と呼ばれる神父たちさえ、疑いがあればこそつねに、自分の信仰の強化を神に祈っておられました。悪魔は大きな力をもっております。われわれはそれに負かされてはなりません。神にお祈りなさい。おすがりなさい。神にお祈りなさい」と、彼は気ぜわしそうにくりかえした。

司祭は、何か考えこんだように、しばらく黙っていた。

「あなたは、わたくしの教区民で神の子なる、スチュエル・バッキイ公爵の令嬢と、ご結婚なさるのだそうですね？」と、彼は笑顔になってつけくわえた。「なかなか美しい娘さんだ」

「ええ」とレーヴィンは、司祭のためにあかくなりながら答えた。「どうして懺悔式にこんなことをたずねる必要がこの人にあるのだろう」こう彼は考えた。

と、まるでその考えに答えるかのように、司祭は言いだした――

「あなたは結婚生活にはいろいろとしていられる。神はきつと、子孫というものをもってあなたに恵まれるに相違ない。そうじゃありませんか？　ところで、もしあなたが、あなたを不信仰にさそおうとする悪魔の誘惑にうちかつことができぬとしたら、あなたはあなたのお子さんがたに、どんな教育をあたえることができますかな？」と彼は、優しい非難の調子でいった。「もし、あなたが自分の子供を愛しておられるのだったら、あなたは善良な父として、その子のために、単なる富や、ぜいたくや、名誉を望むばかりでなく、そのお子さんの救われることを、真実の光でお子さんの魂の照らされることをお

望みなさるだろう。そうではないですか？　そこで、罪も穢れもない幼いお子さんが、あなたに向かつて、『お父さん、この世の中でわたしをひきつけるすべてのもの——大地や、水や、太陽や、花や、草などといういろいろなもの、いったいだれがつくったの？』こうたずねられたら、あなたはなんとお答えになりますかな？『わしは知らん』などといわれますかな？　神はその大いなるみ恵みによって、あなたの前にそれを開いてくだされているのに、あなたはそれを知らんでいるわけにはいきません。それからまた、あなたのお子さんが『死んでからわたしたちはどうなるの？』ときかれたときに、もしあなたが何もごぞんじなかったら、なんと答えますか？　なんといいってお答えなさるおつもりか？　あなたはお子さんを世間や悪魔のまどわしにまかせておしまいなされますか？　それはよろしくないことですぞ！』彼はこういって、言葉をきり、頭を一方へかしげて、善良そうな柔和な目で、レーヴィンを見つめた。

レーヴィンはもうなんとも答えなかった——それは司祭と争いたくなかったからではなく、今までは自分にこんな質問を提出したものではなかったし、また、自分の子供がこんな質問を発するようになるまでには、まだ十分返答を考える余裕があると思われたからであった。

「あなたは今、人生の本舞台へかかろうとしておられるところだ」と司祭はつづけた。「今こそあなたは道を選んで、それをしっかりと踏んで行かなければなりません。神にお祈りなさい、そのお慈悲をもって、力をお貸しくださるよう、み恵みをたれさせたもうように」と、彼は言葉をむすんだ。「われらの主なる神、イエス・キリストは、あふるるばかり豊かなる愛とみ恵みとをもって、子なるなんじを許したまわるべし……」と司祭は、救済の祈禱をおわると、彼を祝福して放免した。

その日、宿へ帰ってくるとレーヴィンは、このぎこちない用件がすんだことから、しかも、うそをつかねばならぬはめにもならずすんだことから、非常に喜ばしい感じをあげわった。そればかりでなく、彼の心には、あの善良な愛すべき老人のいったことが、最初彼が考えたようなばかばかしいものではなく、そこには何か明らかにせねばならぬことがあるような、ぼんやりとした記憶が残った。

（むろん、今すぐではない）とレーヴィンは考えた。（が、いつかあとで）レーヴィンはこのとき、以前よりもいっそう強く、自分の魂のなかに何か不純なもののあることと、そしてその魂が、宗教にたいする関係では、彼が他人のなかに明らかにみとめて、いやだと思ひ、そ

のために友人のスヴィヤーズスキーを非難した、あれと同じ心境にさまよっていることを、痛感した。

レーヴィンは、その晩許嫁といっしょにドリーのもつて時を過ごして、とくに愉快であった。そしてステバン・アルカジエヴィッチに興奮した気持をうちあけて、自分はまるで、輪を飛び抜けることを教えならされた犬が、とうとうそのこつをのみこんで、求められた芸をうまくやってのけ、叫んだり、しっぽを振ったりしながら、うれしさのあまり、テーブルの上や、窓の上へ飛びあがったりする、あれと同じようにうれしいのだといった。

二

婚礼の日には、レーヴィンは習慣にしたがって（公爵夫人やダリーヤ・アレクサンドロヴナはすべての習慣を守ることをかたく主張してゆずらなかつた）、許嫁の顔は見ず、旅館の自分の部屋で、偶然におちあつた三人の独身者——セルゲイ・イワーノヴィッチと、大学時代の友人で、今では自然科学の教授をしているカタワースフと（レーヴィンはこの男と往来で出会って、自分のところへひっぱって来たのであつた）、それから、彼の結婚の介添人^{かいたん}で、モスクワの治安判事で、レーヴィンのく

ま狩り仲間であるチリコフ——といっしょに食事をした。会食は非常に愉快だった。セルゲイ・イワーノヴィッチはおそろしく上きげんで、カタワースフの風変わりなところをおもしろがった。カタワースフは、自分の風変わりなところが重んじられ理解されているのを感じて、得意になっていた。チリコフは、快活な人のいい調子で、あらゆる話に相づちをうつのだった。

「いいですか」とカタワースフは、講壇でえた癖によつて、言葉を長く引き伸ばしながらいうのだった。「われわれの友人であるコンスタンチン・ドミートリチは、じつに前途有望な青年でありました。が、ぼくはここにいる人のことをいっているのですよ。なぜといって、今その人はいないからです。あの当時、大学を出る時分には、彼は科学を愛し、人間らしい興味をもっていた。それが今では、その能力の一半は自分を欺くことにむけられ、他の一半はこの自己欺瞞^{ごきまん}を弁護することにむけられているのです」

「いやはや、あなたのように徹底的な結婚の敵もないものですねえ」と、セルゲイ・イワーノヴィッチはいった。

「いや、ぼくは敵ではありません。ぼくは分業の味方なのです。なんにもすることのできない人々は、人間をこ

さえなければならぬ。けれども、そのほかの者は、その教化と福祉とに力をつくすべきであります。と、こゝまあぼくは考へてゐるんですよ。ところで、このふたつの仕事を混同するような手合ひは無数にあるが、ぼくはそんな人間ではないんですよ」

「そういうきみが恋をしたと知ったら、ぼくはどんなに幸福だろうと思う！」と、レーヴィンはいった。「どうぞ結婚式にはぜひぼくを呼んでください」

「ぼくはもう恋をしていますよ」

「なるほど、いかにね。あなたもごぞんじでしょうが」と、レーヴィンは兄のほうへ顔をむけた。「ミハイル・セミョーヌイチは榮養にかんする著述をやつてゐるんですよ、そして……」

「ああ、でたらめをいっちゃ困るよ！ なんの研究であらうと、そんなことはどうでもいいのです。問題は、ぼくがまさしく、いかに恋しているということにあるのですからな」

「しかし、そんなことは、きみが細君を愛するさまたげにはなりませんよ」

「そりゃ、いかのほうはさまたげませんがね、細君のほうはさまたげますよ」

「どうして！」

「いや、これはじきわかるようになりますよ。きみは今農事や獵を愛している。が、まあ見ていてごらん下さい！」

「あ、今日、アルヒーブが来ましてね、ブルードノエには、しがが無数にいる、くまも二匹いたといつてましたぜ」とチリコフがいった。

「じゃ、ぼくぬきで、諸君はそれを捕るわけでしょうね」

「なるほど、そうだよ」とセルゲイ・イワーノヴィッチはいった。「おまえはこれからはくま狩りにもおさらばしなければなるまいね——細君が許すまいから」

レーヴィンはほほえんだ。妻が自分を行かせないだろうという予想は、非常に愉快だったので、彼はくまを見ると喜びを、もう永久に見すてしまおうとさえ思ったほどであった。

「しかし、なんです、やはり、きみぬきで、その二匹のくまを捕るのは残念な気がしますね。きみは、このまえのハビロウオでのことを覚えていますか！ きつとすばらしい獵ができるでしょうよ」とチリコフはいった。

レーヴィンは、獵のないところででも何かしらおもしろいことはありうる、こういう想念で相手の幻想を破り

たくなかったので、ひと言も口をださなかった。

「独身生活におさらばをするというこの習慣は、無意味にできたものじゃないよ」とセルゲイ・イワーノヴィッチはいった。「どんなに幸福であるにしても、やはり自由は惜しいものだよ」

「白状なさいよ。ゴーゴリの書いた花婿のように、窓からとびだしたいというような気持のあるということをしなさい」

「そりゃあるにきまっていますさ、だが、白状はしませんや！」とカタワースフはいって、声高に笑いだした。

「どうです、窓は開いていますよ……」すぐ、トゥヴェーリーへ出かけようじゃありませんか！ 牝^めが、一匹いるんです。しかも穴まで行けるんですからね。ほんとに、五時の汽車で出かけようじゃありませんか！ あとは好き勝手なまねができますぜ」と、にこにこしながらチリコフがいった。

「だが、ぼくはじっさい」と、レーヴィンもにこにこしながらいった。「自分の心のなかに、自由を惜しむという感情を見いだすことができないんですよ」

「いや、きみの心のなかには今、なんにも見わけられないほどのカオス（混沌）がたちこめてるんですよ」とカタワースフはいった。「まあ、しばらく待ってごらん

さい、少し気分がしずまれば、見つけられますよ」

「いや、それならたとえ少しでも、ぼくは自分の感情や（彼は、人の前で恋ということを口にしたくなかった）、……幸福のほかに、やはり自由を失うのは惜しいということを感じそうなものなんですが……それどころか、かえってぼくは、この自由を失うということに、喜びを感じているくらいですよ」

「いやはや！ とでも手のつけられないしろ物ですね！」とカタワースフはいった。「ではひとつ、レーヴィンの全快のために乾杯^{かんぱい}しましょう、それとただ、同君の空想の百分の一でもが実現されるように祈りますかな。もしそうなったひには、今までこの世になかったような、大した幸福が実現することになるわけですからな」

食事がすむと客たちは、式にのぞむ支度になにであうように、帰っていった。

ひとりになると、レーヴィンは、いまの独身者たちの話を思いだしながら、もう一度自分の心にたずねてみた——自分の心に、はたして彼らの話したような、自由を愛惜する気持があるかどうかを。

彼はこうたずねてみて、にっこり笑った。（自由？ なんのための自由だ？ 幸福はただ、彼女の希望、彼女の思想を、愛し、願い、考えるということだけにあるの

だ。つまり、自由というものは少しもないのだ——これが幸福というものなのだ！」

（だが、おれは彼女の思想を、彼女の希望を、彼女の感情を知っているだろうか？）こうとつぜん、ひとつの声が彼にささやいた。微笑は彼の顔から消えて、彼は考えに沈んだ。と、とつじよとして彼の心に、きたいな感じが現われた。恐怖と疑惑——すべてにたいする疑惑が彼の心に現われたのである。

（彼女がおれを愛していないとしたらどうだろう？ ただ結婚しなければならぬために、おれのところへくるのだとしたらどうだろう？ もし彼女自身が、自分のしていることを知らないとしたらどうだろう？）と彼は、われとわが心にたずねた。（彼女ははっとわれにかえって、もう結婚してしまつてから、おれを愛していないこと、愛するわけのなかったことを理解するかもしれない）すると、彼女についての奇怪な、きわめてよからぬ考えが、彼の頭にうかんできた。彼は、一年まえのように——ウロンスキイといっしょにいた彼女を見たあの晩がまるで昨日でもあったように、ウロンスキイにたいして彼女を嫉妬（しよと）はじめた。そして、彼女が自分にうちあげたことも、全部ではないかもしれぬと疑つたりした。

彼はやにわにとびあがつた。（いや、このままにして

はおけない！）こう彼は絶望して、自分にいった。（彼女のところへ行つて、これを最後にたずねたり、いったりしてみよう——わたしたちは自由です、結婚は思いとまったほうがよくはないでしょうか？ と。どんなことだつて、永久の不幸や、屈辱や、不信よりはましだからな！！）彼は心に絶望をいだし、すべての人間にたいし、自分にたいし、彼女にたいして憎悪の念をいだしながら、旅館を出て、彼女のもとへと馬車をとばした。

彼は、奥のほうの部屋で彼女を見つけた。彼女はトラソクに腰掛けて、いすの背や床板の上にちらばっているいろんな色の着物を選びわけながら、女中を相手に何かの始末をしていた。

「あら！」彼女は彼を見ると、喜びから全身を輝かして叫んだ。「まあ、どうしてヴィ（あなた）は、どうしてあなたは？（この最後の日まで彼女は彼にたいして、親しい呼びかたの『ツイ（あなた）』と、他人行儀の『ヴィ（あなた）』との両方を用いていた）ほんとに思いもかけませんでしたわ！ わたくしね、いま、娘時代の着物を選びわけるところですよ、だれにどれをやったらいいかと思つて……」

「ああ！ それはたいへんけっこうなことです！」と彼は、暗い顔つきで女中のほうを見ながらいった。